

# 不遇の中に二百の作品 文学、科学、歴史に十三の著作集を残した

姪にとつては  
やさしい叔父だった

「出る杭は打たれるといつのでしょ  
うかね、人より一歩先に進んで行く人の  
一生は平坦なものでなかったですよ。  
異端者だったんですかね。しかし、  
私たちには、やさしい叔父でしたよ。」

伊藤至郎の姪の伊藤明さんは、今年  
81歳。南羽鳥の至郎の生家を継いで、  
元気に思い出を語ってくれた。

至郎は上京してから、不遇な環境の  
中で、文学、科学、哲学、歴史等の分  
野で数々の作品を発表した。『日本近代  
文学大事典』には、次のように掲載さ  
れている。

「明治三三・一一・三丁昭和三〇・一  
〇・一七(一八九九)一九五五)評論  
家。千葉県長生郡一宮町生まれ。大正  
一四年東京物理学校数学科卒。はじめ  
倉田百三の『生活者』に寄稿。鷗外に



伊藤至郎(いとう しろう)

成田市南羽鳥に生まれる。倉田百三主宰  
の『生活者』に寄稿。長谷川如是閑を議長  
とする「唯物論研究会」に参加。主な著書  
に、『鈴木雅之研究』、『伊能忠敬・鈴木雅之』  
『鷗外論稿』がある。

おける科学と芸術との近接の実相を探  
り、「物識る人の淋しげに独りたゞず  
む」姿の、地上におとす陰影をこらえ  
た『鷗外論稿』(昭一六・一〇 光書房  
増補再版 昭二五・二二 学芸社)は、  
秀れている。科学史に関する著書もあ  
る。」

しかし、「この事典が至郎出生の地を  
長生郡一宮町というのは誤りで、一宮  
町は、至郎が昭和17年から病没する同  
30年まで住んでいたところであり、出  
生地ではない。また、至郎は「評論家」  
となつてはいるが、その多彩な創作活動

から、「文学者」とも「科学者」とも言  
える人物である。

## 数学教師のかたわら 作家活動を続ける

伊藤至郎は、明治32年(一八九九)  
印旛郡兼住村南羽鳥宮下(現在の成田  
市南羽鳥1-19番地)の農家で、父源  
太郎、母いその間の2男2女の次男と  
して生まれた。

至郎は教師を目指して、千葉師範学  
校を受験したが、試験には失敗した。



青少年のために書かれた  
『科学の発展』

大正7年頃、至郎は上京、東京物理  
学校別科へ入学する。この前後は、貯  
金局の事務員をしたり、新聞配達をし  
たりの学費稼ぎをし、実家からの仕送  
りも受けていたようである。

同年書かれた『長沼の日記』には書  
店で働いていたこと、同8年には『或  
る秋の夜』の作品を書いて万朝報の懸  
賞小説に当選、賞金10円を獲得と記し  
ている。

同8年、20歳になった至郎は、兵役  
に就き、近衛歩兵第4連隊に入隊、2  
年間の軍隊生活を送っている。

この軍隊の体験が後年の『生活者』  
(昭和3年3月号)に書かれている。

「ついに至郎の著作活動については  
成田市史研究20号(平成8年3月)の  
「治安維持法下に生きたある思想家の軌  
跡 伊藤至郎著作・執筆年譜」小宮山  
博史の一文に詳しい。

同14年、至郎は、東京物理学校数  
科を卒業。卒業後、神奈川県立横浜第



伊藤至郎の自筆原稿

2中学校に奉職、昭和4年4月、京華商業に移り、同5年4月、明星学園中学校の数学教師となっている。

少年時代、カントの「プロレゴメナ」に刺激されて、哲学者を夢見て数学教師になったという至郎は、教師や作家生活を続けながら、今一つ違つて世界に踏み込んで行った。

## 唯物論研究会に参加 次第に弾圧が厳しく

昭和7年、至郎は、長谷川如是閑を議長とする「唯物論研究会」の発起人

となり、服部之織、清水幾太郎、羽仁五郎等と創立大会にも参加した。同8年至郎は、治安維持法違反容疑で検挙されている。

長谷川如是閑は、唯物論研究会は「自然科学、社会科学及び哲学における唯物論を研究し、且つ啓蒙に資するを目的とする」団体と規定していた。

しかし、軍国主義への傾斜を深めていった時代状況の中で、治安維持法（大正14年4月22日布告）による弾圧は激しさを加え、こうした学術研究団体にも及んでいた。

同9年11月、至郎は、治安維持法違反により懲役2年執行猶予3年の判決を受けた。35歳の時である。至郎はこのことで、同13年9月にも検挙されている。

一方、至郎の文筆活動の活発さは変わらず、同10年には、岩波書店発行の『文学』第3巻10号に、事典でも優れた作品とされた『臨外論稿』が掲載されている。

同11年には、伝記学会発行の『伝記』第3巻12号に「鈴木雅之のこと 民生要論その他に就いて」を論究し始めている。

同13年、至郎は、千葉県安房郡青尾村（現在の鴨川市）出身の佐生光子と結婚した。

光子は当時、結婚して36歳、3女の

母であったが、思想的に一致できない夫を離れて、至郎と結婚したのである。この間のいきさつについては、婦人公論、昭和52年6月号に、井手文子「ある目覚めた女の一生 伊藤光子さんの生き方」に書かれている。

同16年、至郎は一審判決で、懲役2年未決300日を算入する旨の判決が出た。至郎は、豊多摩刑務所に1年東京拘置所に1年半拘留されていたが、ここで結核に罹病、同年4月に保釈となった。

## 『36年をかけた夫妻の執念で 鈴木雅之研究』を出版

昭和17年、至郎夫妻は、長生郡一言町矢倉前に転居した。しかし、文筆活動を続ける中、結核性の微熱が至郎の健康を蝕んでいた。

そつした病状の中で、同16年から同27年にかけての作品が「伊藤至郎著作目録」（13冊）にまとめられている。

これを系統別、年代別に分類してみると、『数学生方法論』が同13年に『数学概論』が同26年に、さらに『対応の学としての数学』、『数学と弁証法』、『通路 或る数学生ノート』については、著者の20余年の数学や哲学に関する集録がなされている。

この研究を背景として弁証法的考察

が深まり、『自然弁証法』が同24年に出版された。

『日本科学史』、『科学のいとぐち』、『科学の発展』は同16年から18年に、『科学への歩み』は同27年に青少年のための文化読本として書かれている。

また、『伊能忠敬・鈴木雅之』が同16年に、そして最後に仕上げた作品が『鈴木雅之研究』（青木書店）であった。

鈴木雅之は、至郎と同じ豊住村南羽鳥（現在の成田市）に生まれ育った。「草莽の国学者」として、明治2年、大学少助教（東京大学の前身の中学校の助教）に任ぜられたが、35歳の若さで病死した人物である。

至郎は、昭和11年から30年の死去に至るまで、その著作集を研究し、雅之の死が「国学の終焉」とした論にまとめた。至郎の死後は妻の光子がこの刊行を引き継ぎ、17年目にしてこの本を自費出版した。

36年の歳月をかけて郷土の先人と学問のために『鈴木雅之研究』を世に出した夫、そして妻光子の「まことに執念の書です」というあとがきには、深い敬愛の念に打たれるものがある。

この他、至郎の生涯の小作品、小論文は『百編』に及んでいる。

同30年10月17日、長生郡本納町の長生病院で至郎は、56歳の生涯を閉じた。

（文中敬称略）